



# 赤いエプロン



詩風エッセイ集

皆岡 樹史





# 目次

まえがき	
お腹小言集 . . . . .	3
赤いエプロン	
赤い糸 . . . . .	7
赤いエプロン . . . . .	9
暑いです。暑いです。 . . . . .	11
あなたは特別な人ではなく…… . . . . .	13
いい香り . . . . .	15
縁 . . . . .	16
機械音痴 . . . . .	18
今日も君を思い出にする . . . . .	19
臭い仲 . . . . .	20
グリーンピース . . . . .	21
結婚生活に幸せを感じているか? . . . . .	22
黄砂 . . . . .	23
今夜は独身 . . . . .	24
重装備 . . . . .	25
人生今節の楽しみ . . . . .	26
タコ . . . . .	27
誕生日おめでとう . . . . .	28
トイレと芳香剤 . . . . .	29
にわかなしっかり者 . . . . .	30
寝る前のコーヒー . . . . .	31
春のようなしぐさ . . . . .	33
一坪くらいの風呂場 . . . . .	34
夫婦生活 . . . . .	35
ふざけやがって . . . . .	36
プラチナの指輪 . . . . .	38
ぼくたちは . . . . .	40
嫁さんの実家 (1) . . . . .	41
嫁さんの実家 (2) . . . . .	42

4割引	43
W3	44
あとがき	
結婚記念日	49
奥付	
	53

まえがき



## お腹小言集

何、そのお腹！  
いっしょに歩きたくない。  
少し離れて歩いてね。

炭酸系はお腹が出るから  
やめてと言ったでしょ。  
もう放っておくと  
いつもそうなんだから。  
飲むならお茶にして、お茶に。

また寝る。  
そういう食っちゃ寝の  
生活ばかりしてるから  
お腹が出てくるんよ。  
運動するとか  
歩いてくるとか  
少しは体を動かして下さいよ。

若い頃は  
スリムでかっこよかったのに。  
どうしてそんなに  
お腹が出たんかねえ…。

ホント、松潤は  
かっこいいんだから。  
誰かさんと違って  
お腹が出てないし。

え、ズボンが小さくなった？  
去年買ったばかりじゃない。  
小さくなったんじゃくて  
お腹が大きくなったんよ。  
その都度ズボン買ってたら  
切りがないから  
体を合わせて下さいよ。



赤いエプロン



## 赤い糸

嫁さんと恋愛関係にあった頃、  
ぼくたちは何度か別れたことがある。  
その別れ際のセリフは決まって、  
「ふざけるな！！」だった。  
二度とこんな奴と付き合うものか、  
そんなことを思いながら、  
ぼくは嫁さんとの距離を置いたのだった。  
だけど、それで終わることはなかった。  
何度別れても、ぼくたちは縋りを戻し、  
最終的に結婚まで至ったのだった。  
運命の赤い糸なるものがあるらしいが、  
おそらくぼくたちはその糸に結ばれていて、  
どんな別れ方をしたとしても、  
何度別れたとしても、  
結局は縋りを戻すことになる。

さて、赤い糸で結ばれた人と出会い、  
運命に引きずられるように結婚する。  
フィクションでもノンフィクションでも、  
語られるのはいつもここまでだ。  
ではいったい、  
その後の二人はどうなるのだろうか？  
人も羨むような幸せな家庭を築くのだろうか？  
愛情いっぱいを送るのだろうか？  
経験から言わせてもらえば、  
決してそんなことはない。  
どこにでもあるような家庭を築き、  
どこにでもあるような生活をするだけだ。  
もし赤い糸の影響があるとすれば、  
それは愛情の有無などということではなく、  
窮屈ではないということだ。  
とにかく、ほどこうにもほどけない糸で

結ばれている二人だから、この先も  
今日が終わって明日が来るという生活を  
二人で続けていくに違いない。

## 赤いエプロン

就職をした頃のこと  
職場の掃除をやっていると、  
後ろから「すみません」という  
小さな声が聞こえた。

振り向くとそこにいたのは、  
初めて見る同期の女性。  
その時突然ぼくの目に、  
浮かんだ一つの光景――

赤いエプロンを着けて、  
台所の向こう側で、  
笑顔でうなずきながら、  
料理している彼女の姿。

その時は疲れているんだと、  
気にもとめなかったけれど、  
なぜか偶然が重なって、  
二人はつきあい始めた。

その後ぼくたちは結ばれ、  
二人で生活を始めた。  
居間でくつろぐぼくの目に、  
映った一つの光景――

赤いエプロンを着けて、  
台所の向こう側で、  
笑顔でうなずきながら、  
料理している彼女の姿。

出会った頃は疲れなんだと、  
気にもしてなかったけれど、

あのとき浮かんだ光景は、  
未来の一コマだった。

赤いエプロンを着けて、  
台所の向こう側で、  
笑顔でうなずきながら、  
料理している彼女の姿。

今もぼくたちは二人で、  
ありふれた生活をしている。  
テーブルのイスにさりげなく、  
かかる赤いエプロン。

暑いです。暑いです。

エアコンがダメなぼくたち夫婦は  
毎年夏になるとすべての窓を全開にして  
部屋の中に自然の風を呼び込んで  
心ゆくまま吹かせている。  
それが実に心地よく、この季節の  
楽しみのひとつになっている。

さて、今年は当たり年なのか  
例年になくいい風が  
部屋の中を吹き抜けていく。  
その、ほどよい涼しさのおかげで  
寝苦しくもなく、寝汗もかかず  
本当によく眠れている。

ところが、たまにその風が  
とんでもないいたずらをする。  
呼びもしない雨の粒まで  
部屋の中に連れてくるんだ。  
だから風がいたずらする日には  
雨の降り込んでくる窓だけ閉めている。

大雨の日はとくに酷くて  
すべての窓から雨が来る。だから  
すべての窓を閉めておかないと、雨は  
窓際にいる、ぬいぐるみたちを襲い  
さらにはその奥に寝ている  
ぼくたちを襲う。

すべての窓を閉めたら閉めたで  
部屋は高温高湿の地獄と化す。  
今夜はそういう夜だ。とにかく  
寝苦しくて、寝汗もかいて

全然、まったく、眠れやしない。  
暑いです。暑いです。暑いです。



## あなたは特別な人ではなく……

あなたは特別な人ではなく  
ただぼくの人生の中に存在している  
一人の女なんですよ。  
ぼくの運命における必然の人であって、  
出会うべくして出会った人なんです。  
例えていうなら、  
お祖母さん、お母さん、  
お姉さんに、妹さん。  
そういった類の人なんですネ。  
だからぼくはあなたに対して、  
飾る必要もなく、  
特別な言葉もいらない。  
それはあなたにしたってそうでしょう。  
あなたにとってのぼくは  
あなたの人生の中に存在している  
一人の男であるということ。  
例えていうなら、  
お祖父さん、お父さん、  
お兄さんに、弟さん。  
ね、別に変わりはないでしょう。  
違っているところがあるとすれば、  
あなたが女で、ぼくが男、  
ただそれだけの違いなんですよ。  
ぼくは間違いなく人生に忠実で、  
おそらくは運命にも忠実で。  
あなたは間違いなく人生に忠実で、  
おそらくは運命にも忠実で。  
そのお互いの人生の中に、  
あなたはいて、ぼくはいて、  
それが出会うべくして出会った。  
ぼくはあなたの人生の中に  
存在している一人の男。

あなたはぼくの人生の中に  
存在している一人の女。  
あなたにとってのぼくは  
決して特別な人間ではないのです。

## いい香り

最近嫁さんが

いい香りのする洗剤を使っている。

それはそれでいいのだが

時々そのいい香りが

嫌味に変わることがある。

いい香りの成分と人間の汗の成分が

うまくと調和せずに

アンモニアのような臭いになるのだ。

その洗剤の謳い文句だと

いい香りは長時間続らしい。しかし

それは香りの付いた衣類を着ないで

タンスなどにしまっておけばということだ。

残暑がぶり返し汗まみれの毎日だ。

ただでさえ不快な思いをしている上に

衣服の小便臭攻撃だ。

いい香りはもういいから

疲れが取れるような香りのする

洗剤を開発してほしいものだ。

## 縁

嫁さんと出会う前

ぼくには「この人となら」と思う人がいたのです。  
相手の好意はちゃんとぼくに伝わっていたし、  
ぼくの好意もちゃんと相手に伝わっていた  
と思うのであります。  
正式に付き合っていたわけではないけど  
何回かデートもしている。  
ドライブに誘ったこともあるし  
祭りにも行ったこともあるし  
飲みに行ったこともあるのです。

あれは夏祭りの時だったな、  
急に彼女の態度がよそよそしくなったのです。  
「どうしたのかな？」と思っていたら  
彼女が結婚するという噂が流れてきた。  
同じ職場にいい人が出来たというのです。  
それはそれでショックだったのですが  
そこにはさらにショッキングなことがありました。  
何と彼女が結婚に到った理由のひとつに  
ぼくに彼女が出来た  
というのがあるというではないですか。

その頃ぼくに彼女なんていませんでした。  
もし彼女と呼べる人がいたとするなら  
それは彼女だったわけで、  
他の女性とは会話こそすれども  
ドライブも祭りも飲みに行くことも  
一切なかった。つまりは彼女の勘違い、  
というか誤解だったわけです。  
あの頃はさすがに「何で？」と思いました。  
勘違い、いや誤解を解こうと思ったし、  
いっそ奪い取ろうかとも思いました。

しかし、相手の気持ちがすでに  
こちらにないのがわかったので  
そのまま流れに任せておくことにしました。  
今になってみれば、  
それでよかったと思います。  
今ならその頃にはわからなかった  
「何で？」の理由もわかりますからね。  
それはそれは簡単な理由で  
つまり彼女とぼくとの間には  
「縁」というものがなかったのです。

もし無理をして奪い取ったとしても、  
結局彼女とぼくは結ばれることはなく  
回り回って、最終的には  
今の状態に納まっていると思うのです。  
それが縁なのだからです。  
今そのことを思い出のひとつとして  
客観的に見る事が出来るのも  
そういう縁なのだからです。  
それゆえに奪い取らなくてよかったと思う  
今日この頃であります。

## 機械音痴

ちょっと腹が出てしましましてね、  
寝ている間に嫁さんから、その  
お腹の写真を撮られたのです。目が覚めると、  
嫁さんがケータイを見ながら笑っている。  
「どうしたんだ？」と聞くと嫁さんは  
勝ち誇ったような顔で「ほーら」とぼくに  
ケータイを手渡し、その写真を見せるのです。  
しかしこういう時、ぼくは慌てず騒がず、  
落ち着いて何でもない風を装う男なのです。  
「ふーん」と言いながら興味なさそうな顔をする。  
すると嫁さんは「なーんだ、気にしてないのか」  
と肩すかしを食らったような顔をする。  
その顔を見ながら、ぼくはケータイのその写真を  
慌てず騒がず、かつ素速く削除するのです。

これが嫁さんだと怒り顔なんかして、  
「もう、消してー！」などと大騒ぎしながら  
ぼくのケータイを無理矢理取り上げる。  
でも、大丈夫。嫁さんは機械音痴で  
自分のケータイの操作は出来ても  
他人のケータイの操作がダメなのです。  
だから自分の間抜けな写真が削除出来ない。  
削除出来ないので、ぼくにケータイを戻し  
「お願いだから消して」と言う。そこで  
ぼくはを写真を削除するふりをしてSDに移す。  
そして「ほら、もう消えただろ」と本体の  
空になったフォルダを見せる。嫁さんは安心する。  
ぼくは心の中でニヤッと笑う。そして後で  
ゆっくりとその間抜けな写真を見るのです。

## 今日も君を思い出にする

今日一日が情けなくて  
ぼくは何気なく君を見る  
君はかすかに笑みを浮かべ  
小さくうなずいて席を立つ

ぼくはやっぱり君が好きで  
二度と離れて暮らすなんて  
とても出来ないことなんだと  
君をまた今日の思い出にする

途切れた愛の日々を  
ひとつひとつ思い出しては  
胸の痛くなるような、そんな一日

ぼくがこうして上を向いて  
いけるのも君がいるからのこと  
君を愛する、だからぼくがいる  
今日も君を思い出にする

## 臭い仲

幼い頃周りの大人たちとは  
乳臭い仲だった。

小学生の頃の友だちとは  
鉄錆び臭い仲だった。

初恋だった彼女とは  
粉ジュース臭い仲だった。

学生時代の友だちとは  
整髪料臭い仲だった。

部活の仲間とは  
足臭い仲だった。

その頃好きだったあの子とは  
レモン汁臭い仲だった。

就職した後の仲間とは  
酒臭い仲だった。

今の若い人たちとは  
香水臭い仲になり

幾時代が過ぎて嫁さんとは  
醤油臭い仲になっている。



## グリーンピース

グリーンピースが大っ嫌いだ。  
チキンライス、カレーライス、オムライス、  
緑の豆が浮かんでいるだけで、  
もう食べる気が失せてしまう。  
ピースご飯なんかもってのほかで、  
においだけでも吐き気がする。  
何でそんなに嫌いなのかと  
聞かれても説明しづらいが、  
とにかく生理的に受け付けない。  
そんなぼくを尻目にして、  
母と嫁はピースご飯を食べている。  
おにぎりにして食べている。  
おいしそうに食べている。  
まあ食べるのは勝手だが、  
それなら臭いの届かない、  
離れたところで食べてほしい。

## 結婚生活に幸せを感じているか？

ある研究所の調べによると、  
寝室を一緒にする夫婦の多くが  
結婚生活に幸せを感じているということだ。  
寝室が一緒といえはうちがそうだが、  
うちの場合、寝室で寝ているのは、  
ほとんどの時間嫁さん一人で、  
ぼくは別の部屋で趣味に打ち込んだり、  
そのままその場で居眠りしたりして、  
寝床に就くのはいつも朝方近くだ。  
では幸せを感じてないのかというと、  
そうではない。  
嫁さんはベタベタするのが好きではないし、  
ぼくの趣味によからぬ期待をかけているし、  
二人分の寝床を一人占めできるし、  
充分幸せを感じている。  
ぼくもゆっくり趣味に打ち込めるし、  
嫁さんのいびきに悩まされることもないし、  
かかと落としの被害に遭うこともないし、  
充分幸せを感じている。  
結婚生活をどう捉えるかの問題は残るけど、  
うちに関していえば、  
この調査結果は間違っていない。

## 黄砂

前の家で飼っている駄犬は  
黄砂で鼻をやられたのか  
クシュンクシュンとやっている。  
それに釣られてうちの嫁さんも  
クシュンクシュンとやっている。  
花粉が飛んでいても平気なのに  
どうして黄砂にやられるのだろう。

聞けば鼻がムズムズむず痒く、  
のどがチクチク痛いのだと言う。  
そう言いながら嫁さんは  
ティッシュを手にして  
痛々しく鼻をかんでいる。  
涙を流しながらかんでいる。  
何度も何度もかんでいる。

おそらくはこの一带に  
たくさんの角を持つ  
金平糖のような形をした  
微かい菌が相当量  
黄砂に紛れてやって来て  
酸っぱい臭いを放ちながら  
浮かんでいるのだろう。

前の家で飼っている駄犬は  
黄砂で鼻をやられたのか  
クシュンクシュンとやっている。  
それに釣られてうちの嫁さんも  
クシュンクシュンとやっている。  
心なしかぼくののども  
チクチクチクチク痛みが走る。

## 今夜は独身

1、  
義父の法事の準備で  
嫁さんは実家に帰っている。  
というわけで  
今夜家にいるのは  
ぼく一人なのだが。  
夜中に目が覚めた時に  
いつもの場所に  
いつもいる嫁さんが  
いつものように  
イビキをかいていないと  
何か変な気分がする。

2、  
あ、そうだ。明日は  
いつもの飲んでいる  
嫁さんのコーヒーが  
飲めないんだった。  
自分でいれたコーヒーは  
なぜかまずいので、結婚以来  
自分でいれたことがない。  
当然明日もいれる気はない。  
というわけなので、明日は  
ちょっと早起きして  
出来合いのコーヒーを  
コンビニに買いに行かないと。  
あ、その前にやることがあった。  
自分一人で起きないと…。

## 重装備

零時を過ぎた。  
ぼくと妻はコンビニまでの  
三分の道のりを歩いている。  
たった三分の道のりではあるが、  
ぼくたち夫婦は厚着をしている。  
それもかなりの重装備だ。  
昨日の寒さが気持ちの中に残っていて、  
まだまだ外は寒い感じがしたのだ。  
ところが外に出て驚いた。  
昨日あれだけ寒かった夜は、  
今日は嘘のように暖かい。  
汽車の煙のように白かった息も、  
今日はほとんど透明だ。  
もちろん屋根の雪は溶けている。  
ほのかに沈丁花の香りもしている。  
来週はいよいよ彼岸に入る。  
少し汗ばんでもきた。だけど、  
ぼくたち夫婦は厚着をしている。  
それもかなりの重装備だ。  
コンビニに入ると店員が、  
「いらっしゃいませ」と言いながら、  
不思議そうな顔でぼくたちを見た。

## 人生今節の楽しみ

夜、嫁さんと二人でスーパーに  
明朝のパンを買いに行く。  
それからビデオなんかを見て、  
寝る前のひとときを楽しむ。  
人生今節の楽しみは  
まァ、こんなところですかね。

では人生次節の楽しみはというと  
それがまだはっきりしてないですよ。  
まァ今節とあまり変化を加えず  
そこにたまの旅行などを入れた人生が  
望ましいのではありますかね。

で、その人生次節はいつからかという  
それもまだはっきりしていなくて。  
まァまもなく始まると思うんですがね。

その節は今よりももっと  
心に余裕が出来ているだろうから  
もっともっと楽しめることでしょうね。

## タコ

ペンを持って仕事をしていると  
中指にタコが出来ている。  
これは中指とペンとの  
絡み合いから生じたものだ。  
靴ダコ、麻雀・パチンコダコも、  
みんな理屈は同じこと。  
異物との絡み合いから生じている。

心だって同じことで、  
絡み合いの末にタコが生じる。  
例えば妻の呼び名がそうだ。  
付き合い始めた頃はいつも  
呼び名に躊躇していたが、  
今では「おい」ですませている。  
絡み合いの末にこうなったわけで、  
つまりは「おい」がタコなのだ。

倦怠期の予防のためにもこのタコは、  
削ってやる必要があるのだが、  
いったい「おい」という言葉の、  
どこをどう削ったらいいのだろう。  
今さら名前なんかで呼べないし。

## 誕生日おめでとう

今日は嫁さんの誕生日なので  
何か食べに行こうと思っていたら  
あいにく嫁さんは送別会だという。  
で、今夜は一人でスーパーに行き  
一人で食事しなければならない。

さて、一人で食事はいいのだが  
問題は一人で行くスーパーだ。  
何をかうのか迷っているうちに  
「面倒だ、全部買ってしまえ」と  
ついつい大人買いしてしまうのだ。

普段は買いすぎてしまう嫁さんを  
阻止する立場にぼくはあるのだが  
一人だとこんなふうになってしまう。  
つまりはよく似た夫婦だということだ。  
はい、誕生日おめでとう。



## トイレと芳香剤

いくらトイレのにおいを隠しても  
においは隠せるものではない。  
芳香剤を置いて隠したつもりでも  
どこかにトイレのにおいは残っている。  
そして芳香剤の力が弱まれば  
再びトイレのにおいで満ちてくる。  
今度は元々あったトイレのにおいに  
気の抜けた芳香剤の香りまで加わって  
前にも増して嫌なにおいになる。

芳香剤の香りとトイレのにおいは  
本来共存するものではないので  
芳香剤がよい香りであればあるほど  
そのギャップは激しくて、においは  
さらに酷いものになってしまう。  
そんなにおいの蓄積の歴史が  
ひいては家全体のにおいになるわけで  
だからうちは芳香剤を使わずに  
消臭剤にしているんですよ、奥さん。

## にわかなしっかり者

嫁さんと二人で今宵の酒と、  
明朝のパンを買うために、  
近くのコンビニに歩いて行った。  
お目当ての芋焼酎と、  
お気に入りのレーズンパンを選び、  
レジに並んで待っていると、  
嫁さんが小銭がないと言い出した。  
結局ぼくが全部出したのだが、  
なぜかお釣りが戻ってこない。  
「お釣りはどうなったんだ？」と聞くと、  
「お釣りがいるの？」という答え。  
「当たり前だ。  
いつからおまえはしっかり者になったんだ？  
そういうふうには育てたおぼえはないぞ」  
そう言うとおぼくは、  
にわかなしっかり者のポケットから、  
しっかりお釣りを取り戻した。  
手には十一円乗っていた。

## 寝る前のコーヒー

熱いコーヒーを飲んでから  
いつもぼくは寝ています。  
それじゃ眠れんだろうと  
いろんな人が言うけれど  
これがけっこう眠れるのです。  
逆に飲んでなかったら  
眠れないかもしれません。

昔はコーヒーがまったく  
飲めなかったのです。  
小学生の頃、ひょんなことから  
コーヒーをがぶ飲みしましてね  
それで吐いてしまったのです。  
以来コーヒーが怖くなって  
それが長い時間続いたのです。

喫茶店に行くようになってから  
これでは格好がつかんと思ひまして  
無理してコーヒーを注文したのです。  
もちろん最初はきつかったけど  
だんだん口になじんできて  
何とかトラウマを克服出来たのです。  
だけど飲み過ぎるとやっぱりよくない。

今のようにコーヒーを頻繁に  
飲むようになったのは結婚してからで  
嫁さんの影響が大きかったですね。  
晩食後いつもコーヒーを煎れるから  
ついついそれを飲んでしまう。  
それがいつしか癖になり  
寝る前のコーヒーに繋がるのです。

熱いコーヒーを飲んでから  
いつもぼくは寝ています。  
それじゃ眠れんだろうと  
いろんな人が言うけれど  
これがけっこう眠れるのです。  
逆に飲んでなかったら  
眠ろうという気も起きないでしょう。

## 春のようなしぐさ

春に舞う鳥になれたら  
いつもぼくは君のそばにいて  
二人で空を翔んでは  
ありったけの愛を歌う

こんなひとときにも君は  
苦勞性に体を動かす  
「それでもいいよ」という君を見ていると  
ぼくはとてもやりきれなくて

笑いながら日々を過ごせたら  
こんながいいことはないのにね  
それはこの上もない  
幸せだけど

春のようなしぐさで  
日々を過ごしたいもんだね  
それは届かない夢だろうけど  
こんな小さなひとときだけでも

## 一坪くらいの風呂場

浴槽のコーナーに座って  
風呂場全体を眺めている。  
一坪くらいはあるだろうか。  
これまで正面からしか  
見たことがないので、その  
一坪くらいが広く感じなかったが、  
今ここから眺めると、その  
一坪くらいがけっこう広く感じる。

さて、今は広く感じている  
この一坪くらいの空間だが、もし  
ここに嫁さんが乱入してきたら  
身動きがとれなくなるに違いない。  
いやちょっと想像しただけでも  
もう身動きがとれなくなっている。  
さほど太ってはないのだが  
重圧というか、何というか…です。

## 夫婦生活

朝方、嫁さんのあとに  
トイレに入る時  
ふと『何でこの女の  
生活臭の中にいるんだろう』  
なんて思うことがある。

昼間、嫁さんと二人で  
買い物に行っている時  
ふと『何でこの女と  
共に歩いているんだろう』  
なんて思うことがある。

夜間、嫁さんと二人で  
テレビを見ている時  
ふと『何でこの女と  
くつろいでいるんだろう』  
なんて思うことがある。

夜中、嫁さんのイビキで  
目をさまされる時  
ふと『何でこの女が  
横に寝ているんだろう』  
なんて思うことがある。

縁だと言えばそれまでだが  
考えてみれば不思議なことだ。

## ふざけやがって

生意気なことを言いやがって…。  
時々「別れてやろうか」と思うことがある。  
家を売り払いさえすれば、  
とりあえずローンは消えるわけだし、  
別居しても互いの収入で充分やっていける。  
昼食時そんなことを考えていた。

今朝、  
ちょっとしたことが原因で、  
嫁さんが感情をぶつけてきたのだ。  
それも出がけにだ。  
おかげでちょっとしたことが、  
いちいち気に障ってしまう。

それを表に出さないようにするために  
どれだけの気力と体力を  
消費したと思っているんだ。  
長引く風邪で気が萎えているのに、  
咳込みで体力が消耗しているのに、  
さらに疲れてしまったじゃないか。

いくら本人の気に障ったとしても、  
朝の、それもこちらが仕事に出る間際に  
怒りをぶつけてくる馬鹿はいない。  
朝そんなことがあると、  
それが尾を引いて仕事や生活、  
ひいては人生に影響が出るからだ。

ま、昼間あることをやって発散したので  
人生に影響は出ませんでしたけどね。  
それでも、イライラしているぼくから  
「退かんか」と一喝されて追い払われた



ゴミ収集所のカラスたちは  
十分に迷惑したことだろう。

だいたい文句があるなら、  
帰ってから言えばいいことだ。  
そうすればお互い嫌な気持ちで  
一日を過ごさなくてすむ。  
今度カラスに会ったら、  
ちゃんと謝っておけよ。

## プラチナの指輪

たとえばクリスマスだとか誕生日だとかに  
ぼくは嫁さんにプレゼントをしたことがない。  
逆に嫁さんからプレゼントをもらったこともない。  
お互いそういうことが好きではないので、  
それはそれでいいことにしている。  
そうそう、結婚記念日もそうだ。  
だから嫁さんは結婚記念日を  
曖昧にしか覚えてないのだろう。

ところでぼくは一度だけ  
そういう行事以外の日に嫁さんに  
プレゼントをあげたことがある。  
プラチナの指輪だ。  
いや、別に気取ってそんなものをあげたのではない。  
勤めていた店が閉店する時に、  
それがえらく安値で出ていたのだ。  
それでつい買う気になったのだ。  
つまり衝動買いしたというわけだ。  
さて指輪を買う時に困るのが指のサイズだ。  
ビックリさせてやろうと思っていたから、  
面と向かって聞くことが出来ない。  
そこでプレゼントのことは伏せ、  
嫁さんの指の太さをけなしながら  
指のサイズを聞き出した。  
「13号」その時嫁さんはそう答えた。  
翌日ぼくは13号の指輪を買い、  
その晩嫁さんに指輪を手渡した。  
ところが「入らん」である。  
「ちゃんと13号で頼んだぞ」  
「えっ…」  
指輪をもらえるなんて思ってもなかったので、  
嫁さんは見栄を張って「13号」と答えていたのだ。

実際のサイズは15号らしい。

15号、

それがどれほどの大きさなのかはわからないが、  
サイズをごまかすぐらいだから、

女性にとっては

けっこう恥ずかしい大きさなのだろう。

「サイズを変更してもらおうか」と聞くと、

「少し痩せれば入るからいいよ」とのたまう。

「それならいいや」とそのままにしておいた。

あれから五年ほど経つ。

いまだに嫁さんが指輪をしているのを

ぼくは見たことがない。

指輪をしたことがないということは、

つまり少しも痩せてないということだ。

嫁ブーのやつ、

自分の未来にも見栄を張ったのだ。

## ぼくたちは

この家はなぜか風向きがよく  
夏はエアコンを入れなくても  
少し風が吹くだけで  
十分に満足している夫婦なんですよ  
ぼくたちは

ケンカしても  
特にどちらが折れることをしなくても  
特にどちらが謝るようなことをしなくても  
すぐに普通に帰れる夫婦なんですよ  
ぼくたちは

真っ白なふんわりクリームの上に  
真っ赤な小さいイチゴが浮かんでいる  
それを見るだけでつい笑顔がこぼれる  
そんな単純な夫婦なんですよ  
ぼくたちは

だからね、今は互助会なんか必要ないんです  
こちらの名前を調べることもせずに  
ただ番号順に電話をかけるような会社に  
立ち入ってもらいたくないわけですよ  
はい、ぼくたちは

## 嫁さんの実家（1）

嫁さんの実家に行くと、  
なぜか気を遣ってしまう。  
居場所に気を遣う。  
お茶一杯に気を遣う。  
箸の運びに気を遣う。  
トイレに行くのに気を遣う。  
挨拶だけすませて  
さっさと帰りたいのだが、  
嫁さんの尻がえらく重い。  
だから余計に気を遣う。  
咳をするのに気を遣う。  
テレビを見るのに気を遣う。  
寝転ぶのに気を遣う。  
帰るタイミングに気を遣う。

## 嫁さんの実家（2）

このテーブルは相変わらず座りにくい。  
あの鳩時計はずっと壊れたままだ。  
今日も話題はパチンコか。  
ご飯は一杯で充分だ。  
なぜかそれ以上のおかわりができない。  
トイレの場所がなぜか遠くに感じる。

テレビの音がいつも大きい。  
またドロドロしたドラマがついている。  
することもないから見ているふりをする。  
「この手のドラマが好きなんやね」と言われ  
「ほう、今日は大人しいね」などと言われる。  
好きで大人しくしているわけではない。

また彼らの小さい頃の失敗談だ。  
それが終わると親戚の話だ。  
Hちゃんだの、Yおばちゃんだの  
知らない人の名前ばかり出てくる。  
「しんちゃんはどう思う？」  
そんなこと知るか、こちらに振るな。

食事が終わると、各々の部屋に引っ込む。  
おまけに嫁さんまでいなくなる。  
残されたのはぼく一人。相変わらず  
ドロドロのドラマを見ているふりだ。  
「遠慮せんで、横になってなさいよ」  
そんなこと出来るわけないだろ。いちおう・・・

## 4 割引

家の近くのスーパーは  
夜の8時を過ぎると  
賞味期限翌日のパンが  
4割引になるのです。  
それが安いのかどうかは  
わかりませんが、  
お客様はこぞって  
それを買うのです。  
だけど人気のパンは  
すぐに売り切れます。  
だからぼくたち夫婦は  
人気なんかにかかわらず  
お得だと思うパンを  
毎日選んでいるのです。

## W 3

ぼくは結婚するまでに三人の女性を愛した。  
実はその三人目とつきあった時に  
彼女たちがこの星の人間でないのではないか  
という疑問を持った。  
三人ともどこことなく似た顔をして  
どこことなく似た仕草をしていた。  
ぼくはまずそこがおかしいと思った。  
さらに彼女たちが、微妙に  
地球人離れした考え方を持っていたことで  
ぼくの疑問は深まった。

ただぼくはそのことを自分の中で  
認めようとはしなかった。  
認めてしまうと  
ぼくの持った彼女たちへの愛情が  
純粋なものでなくなると思ったからだ。  
つまり彼女たちに操られて、ぼくは  
愛情を抱かされていると考えたくなかったのだ。  
それはあまりに辛いことだし  
あまりに悲しいことだ。  
だから疑問は疑問として留めておいた。

とはいえ疑い出すと切りがない。  
つきあっていくうちにだんだん  
顕著になっていった彼女たちの冷たさは  
実はそういう態度を取った時に  
地球人がどういう行動を取るのかという  
分析をしているためではないだろうか。  
追えば追うほど離れていったのは  
実はこちらの愛情の深さの究極を  
見極めようとしてやっている  
実験ではないだろうか。



やはり奴らは宇宙人なのだ。ある時  
ぼくはとうとうそのことを認めた。  
その瞬間だった。三人目の彼女は  
ぼくの目の前から忽然と姿を消した。  
同時にぼくの愛情の記憶も消されたのだ。  
その後彼女たちがぼくの前に現れたことはない。  
その時ぼくは中年と言われる年頃になっていたが  
人を愛することを諦めなかった。  
それが良かったのか、ほどなく結婚した。  
もちろんお相手は地球人だ。



あとかき



## 結婚記念日

数日前から何か変だ。  
心に何か引っかっている。  
それが何であるかがわからない。  
別段大したことでもないのだが、  
これだけは忘れてはならない、  
という意識だけはある。  
それでイライラしている。  
さて何だろう？

昼間のこと、  
ラジオを聴いていると、  
結婚記念日のことを言っていた。  
ふーん、結婚記念日か…。  
あっそうだ、結婚記念日だ！  
『冬休み映画まつり』だなんて、  
いったい何を考えていたのだろう。  
あの日はぼくたち夫婦の  
結婚記念日だったんじゃないか。  
しかも忘れていたのはぼくだけじゃなく、  
よりによって嫁さんもだった。  
女性というのはこういうことを  
執念深く憶えているものだけど、  
なぜかうちの嫁さんは違う。  
実際昨年まで結婚記念日を  
間違えて憶えていたし…。

さて、忘れていたのは置いといて、  
誕生日には相手を祝って、  
『おめでとう』という言葉かけるが、  
結婚記念日の場合、  
どういう言葉かけるのが妥当なのか。  
第三者なら『おめでとう』でいいだろうが、

当事者の場合はそれだとおかしい。

『ここまでよくついてきてくれた』か？

…嫌だな、こんな気障な言い方。

『よく頑張った』か？

…別に優勝したわけではないんだし。

ありふれてはいるが、

やはり『ありがとう』が妥当だろう。

その上で『これからもよろしく』だろうな。

よし、これでいこう。

-嫁さんへ

今まで本当にありがとう、

これからもよろしくお願いします。

あなたの幸せと健康以外に

何も望むものはないけれど、

貸した金だけは返して下さい。

…2009年結婚記念日、婿さんより-

奥付





## 赤いエプロン

著者：皆岡樹史（みなおか たつし）

著者プロフィール：

- ・昭和 32 年 福岡県八幡市生まれ
- ・モットー：『人生万事大丈夫！』
- ・趣味：作詞、作曲、弾き語り。
- ・影響を受けた人：一遍，盤珪，高村光太郎，中原中也，ボブ・ディラン，吉田拓郎
- ・影響を受けた書物：「老子」「臨濟録」「日本靈異記」「徒然草」「延命十句観音経靈驗記」
- ・影響を受けたマンガ：「あしたのジョー」「人間交差点」「シュマリ」
- ・ブログ：<https://detan.club/>

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパプー (<https://puboo.jp/>)

運営会社：株式会社ブクログ

---

赤いエプロン

---

著 皆岡 樹史

制 作 Puboo  
発行所 デザインエッグ株式会社

---